

〈資料〉

奈良県における山菜類の調査

河合昌孝

クサソテツ、サルナシ、マツバサ、ヤマボウシ、シオデ、タチシオデ、モミジガサ、ウワバミソウ、ミヤマイラクサ、ツルニンジン、ツリガネニンジンについて、奈良県内での生育状況を調べた。クサソテツ、サルナシ、ウワバミソウなどは比較的容易に確認でき、県内でも広く分布していた。タチシオデ、ミヤマイラクサは生育が確認できた場所が少なく、奈良県ではまれな山菜であると考えられた。

1. はじめに

特用林産物は、林業における素材生産の長期性を補う短期収入源として重要な役割を担っている。特用林産物として分類されるものには、きのこ類、山菜類、樹実類、薬用植物、特用樹類、たけ類、樹脂類、木炭類等があるが、生産額はきのこ類が最も多く、次いで山菜類であり、山菜類は特用林産物でも重要な位置づけにある。また、近年奈良県においても山菜類についての問い合わせが増えているので、山菜普及の基礎資料とするため、県内の山菜類の分布について調査した。

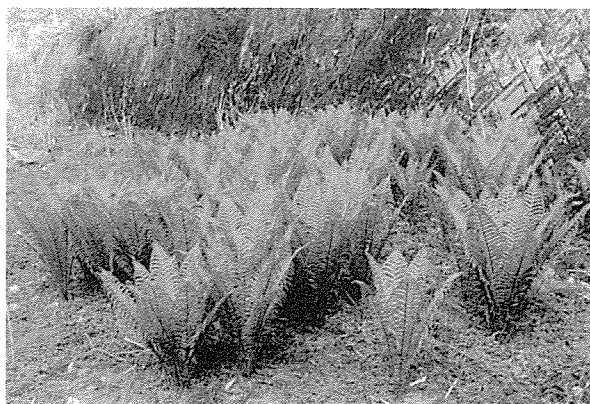


図1 クサソテツ

2. 調査対象及び調査方法

調査対象は、現在栽培されている山菜類(山菜や果実)、または栽培研究がなされている山菜類を中心に選定した。

調査は、2007年及び2008年に、山間部の主に車が通行可能な道沿いを中心に、一部林内の歩道沿いで行い、確認した生育地を地図上に記した。このとき、生育環境の概要も記録した。また生育地の標高は、地図より読み取り、10m単位で四捨五入した。調査した分布状況は、県内を3km方眼のメッシュに区切り、生育が確認できた地点を含むメッシュを塗りつぶして表示した。なお、塗りつぶされていないメッシュは、今回の調査では生育が確認できなかった地域である。

3. 調査結果

3.1 クサソテツ

クサソテツ(図1)は夏緑性のシダで、栄養葉の新芽の部分を食用とする。今回、標高の低い場所において4月中旬には完全に展葉した個体が見受けられた。クサソテツは、栄養葉が直立し、鮮やかな緑色をしていることに加え、しばしば群落を形成するため、6月ごろまでは遠くからでも容易に確認することができた。また、成熟

した個体では秋季に孢子葉を展開し、翌年の栄養葉の芽吹きのところまで残存しているので、栄養葉の展開前でも容易に確認することができた。しかし、7月以降になると、周囲の草本が繁茂するとともにクサソテツの葉が日焼けするため、確認が困難になった。今回の調査では、県の中北部を中心に分布が確認された(図12)。

生育環境としては、大半が河川の砂が堆積した場所やそれに続く田畑の法面、およびスギ林縁部など、比較の日当たりの良い場所であった。一箇所だけ河川から離れたスギ高齢林の中で群落が認められたが、台風により上層木が無くなった明るい場所で生育が旺盛であったが、比較的光量が少ない場所では小さな個体しかなかった。これらのことから、クサソテツは、肥沃で水分が多く明るい場所を好むと考えられる。また、今回確認できた生育地は標高150~790mであり、山間地、平野部を問わず栽培できる可能性が示された。

3.2 サルナシ

サルナシ(図2)は、マタタビ科の落葉性のつる植物で、果実を食用とする。果実は栄養価が高く¹⁾、ツルは工芸用として利用することも出来る²⁾。

今回の調査では、県内の広い範囲でサルナシの分布が確認できた(図12)。その多くが道沿い及び川沿いの林縁部で、十分に光が当たる場所であった。また、周辺の植生も、スギ、ヒノキの人工林、マツ林、天然生広葉樹

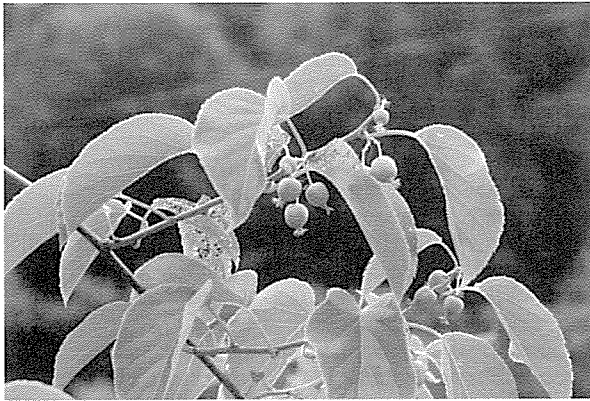


図2 サルナシ



図3 マツブサ



図4 ヤマボウシ

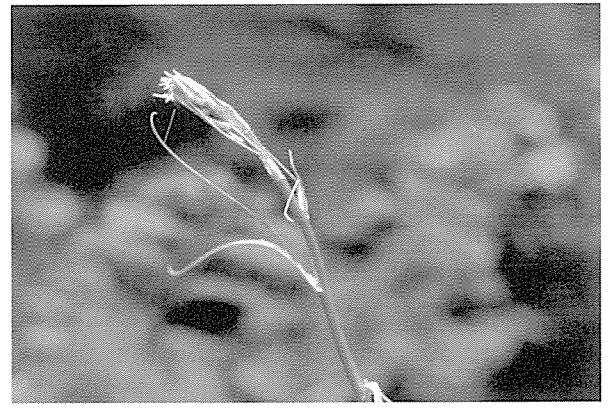


図5 シオデ

林と様々であった。出現地の標高は250~1250mであったが、標高が低い場所では、近縁のマタタビが優占しており、サルナシはまれに出現するのみであった。しかし、500mを超えると、近接した地域に複数のサルナシの個体が生育することが多かった。このことから、サルナシは比較的冷涼な環境を好むと思われるが、標高250m地点で生育が確認できたことから、低地での栽培も十分可能であると考えられる。

生育地も、スギ林、ヒノキ林、マツ林、落葉広葉樹林、崩壊地跡、土捨て場など様々で、地形的にも谷筋、尾根筋、中腹部など幅広く分布し、光環境が十分であれば、あまり環境を選ばないと考えられた。

3.3 マツブサ

マツブサ(図3)はマツブサ科の落葉性のつる植物で、葉やツルに松脂のような刺激臭を持つ。秋に藍黒色に熟するブドウのような果実(図3)を食用とするが、葉やツルを浴用材として利用することも出来る¹⁾。

今回の調査では、サルナシと近接して出現することが多かったため、その適地はサルナシと類似していると考えられるが、出現頻度は低く(図12)、サルナシに比べやや栽培が難しいことが予想される。確認された生育地

の標高は600~1080mであった。

3.4 ヤマボウシ

ヤマボウシ(図4)はミズキ科の落葉高木で、秋に赤く熟す集合果を食用にする³⁾。今回確認できた個体数は少ないが、開花期の7月ごろには、白色の苞(ほう)が目立ち(図4)、遠くからでも容易に確認することができた。また、生育地の標高は、680~1300mとかなり冷涼な地域に分布していた。

3.5 シオデ・タチシオデ

シオデ(図5)及びタチシオデ(図6)はユリ科の多年草で、いずれも春先の新芽を食用とするが、タチシオデは、シオデに比べて早く芽吹き、可食部はやや細い⁴⁾。

シオデの小さな個体は大きな個体に比べて比較的早く芽吹くので、4月上旬でも発見が容易であった。一方、大型の個体では芽吹きの時期が遅く、6月中旬以降に芽吹くものがあった。また、8月以降は他の植物に十分絡まっていなかった個体は倒伏することが多く、発見が困難になった。さらに、道路に近い生育地は道路維持管理のため、夏以降に刈り払われることが多く、春から初夏にかけて確認できた個体が、秋に再び出向いたときには確認できないことがしばしばあった。遅い芽吹きや人為



図6 タチシオデ



図7 モミジガサ



図8 ウワバミソウ

的な刈り払いを考えると、今回の調査でもかなりの見落としがあったと考えられる。生育場所は、ほとんどがスギ林縁もしくは林縁に近い林内であったが、開花可能な大きな個体は林縁部や、間伐後の明るい林内に限られていた。これらのことから、シオデは肥沃で日当たりの良い場所が生育に適していると考えられる。また、出現した標高は210~900mで、幅広い標高での栽培が可能と考えられる。

一方、タチシオデは今回の調査結果では確認個体数も少なく、奈良県ではシオデに比べてまれな山菜であると思われる(図12)。また、出現場所も、シオデはほとんどがスギ林周辺であったのに対し、今回の調査ではタチシオデは総てがヒノキ林周辺であり、生育適地も異なると考えられる。今回確認された生育地の標高は、170~490mであった。

3.6 モミジガサ

モミジガサ(図7)はキク科の植物で、新芽を食用とする。4月~5月にかけて芽吹き、7月ごろまではその独特な葉の形により認識が容易であった。しかし、8月以降一部の地域では、獣によると思われる食害により、植物体の大部分が欠落している場合もあり、確認が困難

であった。このことから、栽培に当たっては獣害の対策が必要かもしれない。

生育地のほとんどが、やや湿り気のあるスギ林内であり、下草がある壮齢~高齢林や間伐の行き届いた若齢林では、比較的大型の個体や大きな群落が見られた。しかし、間伐が遅れている閉鎖した林分では、貧弱な個体しか認められずその個体数も少なかった。このことから、モミジガサは、肥沃で湿り気のある明るい日陰を好むものと思われる。

また、車が通行可能な道沿いでも群落が見られたが、少し林内に入り込んだ場所での確認例が多かった。今回の生育確認地域の広がり(図13)から、すぐに目に付く所には少ないが、県内では広く分布しているものと考えられる。なお、今回確認された生育地の標高は340~900mであった。

3.7 ウワバミソウ

ウワバミソウ(図8)は、イラクサ科の多年草で春先から秋口まで長期にわたって利用できる山菜である¹⁾。

水が染み出しているスギ林内や、上部が樹木で覆われている沢筋の岩場などで確認された。車道から見える場所に群生することが多く、比較的容易に発見することが



図9 ミヤマイラクサ



図10 ツルニンジン

できた。また、水が染み出しているスギ林では、林内を通る車道の路肩沿いにも大きな群落が認められ、資源量は多いものと思われた。確認された生育地も多く、大きな群落も形成していることから、奈良県でも栽培は可能であると考えられる。なお、今回確認できた生育地の標高は340~1080mであった。

3.8 ミヤマイラクサ

ミヤマイラクサ(図9)はイラクサ科ムカゴイラクサ属に属する植物で、新芽を食用にする山菜である。同属のムカゴイラクサや、近縁のイラクサ属の植物の新芽も食用と出来るが⁴⁾、大型で群生することから、もっぱらミヤマイラクサが山菜として利用されている。同属のムカゴイラクサはスギ林などでよく目に付くが、奈良県ではミヤマイラクサはかなり珍しい植物だと思われ⁵⁾、今回の調査範囲では桜井市でのみ生育が確認できた(図13)。今回生育が確認できたのは近接した2箇所、砂が堆積した川辺の日陰(標高460m付近)と、水田跡と思われる明るいスギ林内(標高520m付近)であり、スギ林内の生育地では大きな群落を形成していた。モミジガサもスギ林内で群落を形成することが多いので、ミヤマイラクサはモミジガサと似た様な環境を好むと考えられる。また、今回確認した生育地のうち一箇所は大きな群落であることから、県内でも栽培は可能であると思われた。

3.9 ツルニンジン

ツルニンジン(図10)は主に根茎部を食用とするキキョウ科の多年生のつる性植物で、韓国では食用としての栽培が行われており⁶⁾、日本でも試験栽培が行われている地域がある。

今回の調査では、スギ、ヒノキ等の針葉樹、広葉樹の林縁部や道の法面、林内のギャップなど光がよくあたる場所で生育が確認できた。確認場所の多くが1~数個体の生育であったが、生育地によっては群生する場合も



図11 ツリガネニンジン

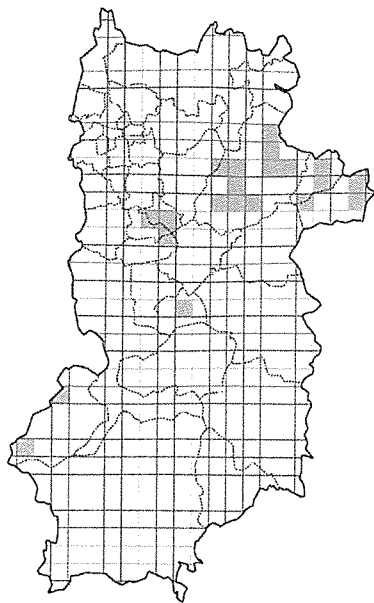
あった。また、林内にも生育している場合があったが、林縁部などの明るい場所に比べ、小さい個体が多かった。今回確認できた生育地の標高は、210~1000mであった。

3.10 ツリガネニンジン

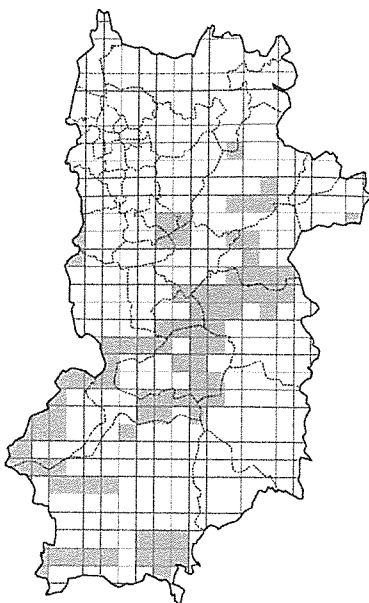
ツリガネニンジン(図11)はキキョウ科の多年草で、主に新芽の部分食用とする山菜である。

今回の調査では、田畑の法面や、道際など日当たりの良い草原状の場所で確認できた。葉が3~5輪生し分かりやすい形態であったので、新芽の時期でも判別は容易であった。また、開花期は青色の花が目立つので生育地での確認が容易であった。生育条件から考え、ツリガネニンジン本来草原の植物であり、今回の調査は山間部が中心であったため、確認できた生育地は少なかったと思われる(図13)。

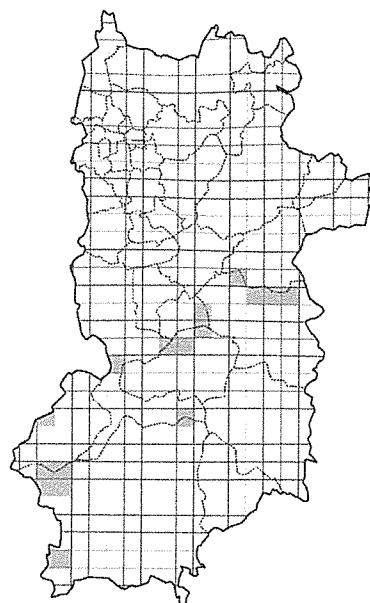
また、ツルニンジンと混在している生育場所も幾つかあり、生育環境は似ているものと思われる。しかし、ツルニジンは林内でも生育していたが、ツリガネニジンはせいぜい林縁部のみで見られたことから、ツルニンジンよりも明るい環境を好むと思われた。なお、今回確認した生育地の標高は100~940mであった。



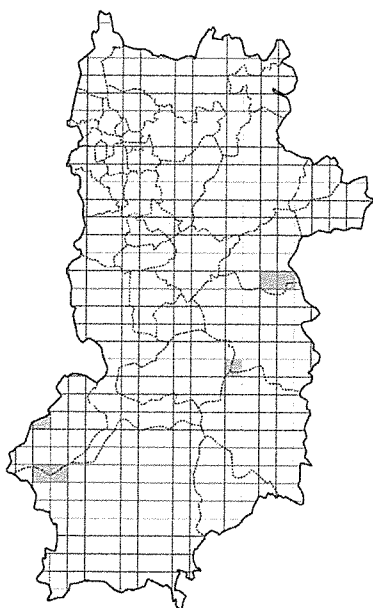
クサソテツ



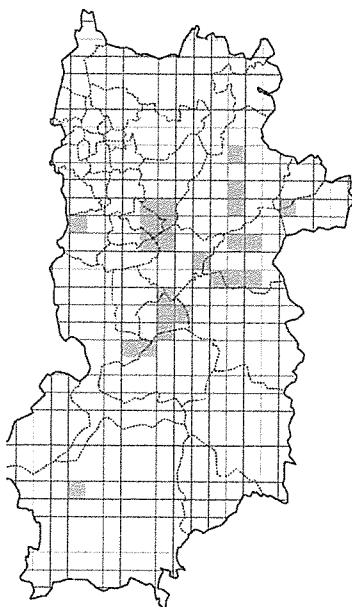
サルナシ



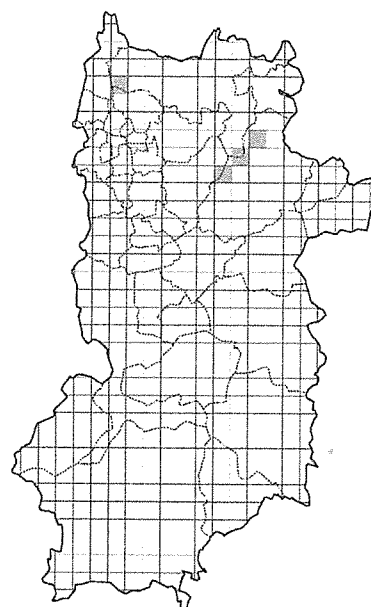
マツブサ



ヤマボウシ



シオデ



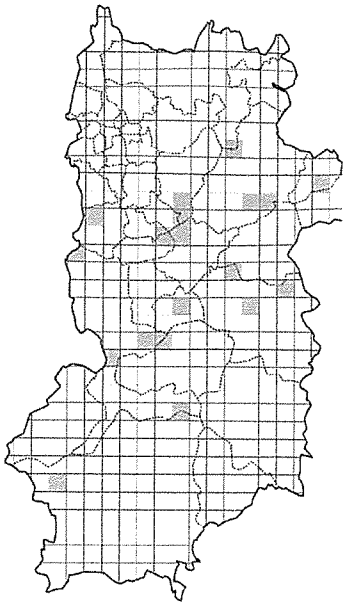
タチシオデ

図12 奈良県における山菜の分布 1

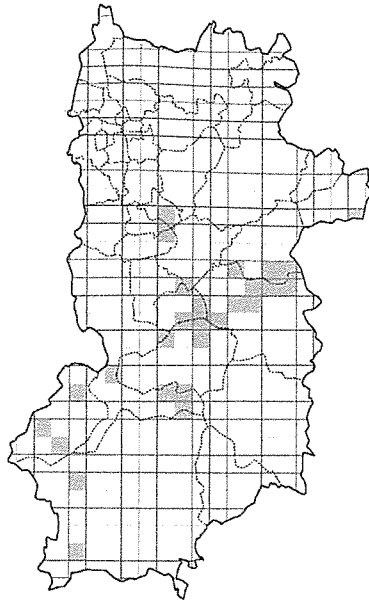
引用文献

- 1) 大沢 章：山菜栽培全科. 農文協. 東京, 1986
- 2) 徳島県農山村振興課：かずら利用の手引き. 徳島県, 1997
- 3) 橋本郁三：木の実・山菜事典 1 - 木本・シダ編 -. 長野, ほおずき書籍, 2001
- 4) 橋本郁三：木の実・山菜事典 2 - 草本編 -. 長野, ほおずき書籍, 2001
- 5) 岩田重夫：奈良植物見聞録 (15). 奈良県植物研究会会報. 30, 4-5 (1986)
- 6) パク・チョルホ：韓国における里山の山菜・雑穀利用とそれに関わる文化. 里山から見える世界 2006 年度報告書 第 I 部 成果報告. 龍谷大学, 60-71 (2007)

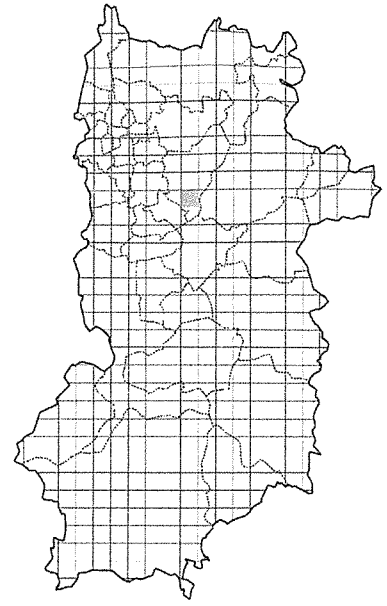
(2008年12月11日受理)



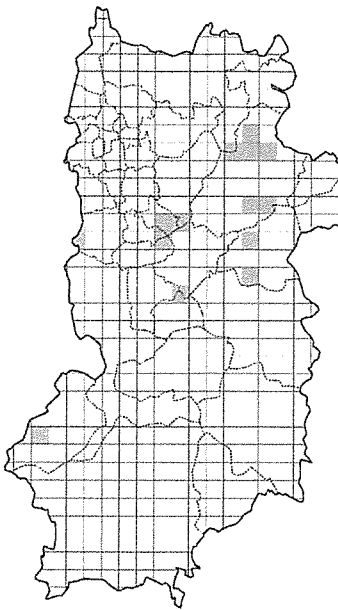
モミジガサ



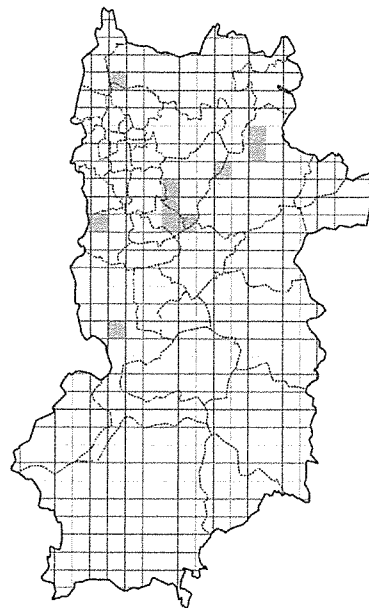
ウワバミソウ



ミヤマイラクサ



ツルニンジン



ツリガネニンジン

図13 奈良県における山菜の分布2